

年頭に寄せて 「これから」

デンマークの哲学者、ケルケゴールという人は「人間に生まれたということは、幕が開いてしまった舞台の上に立つ役者のようなものである」と、言っています。

どういうことかと言いますと、

「役者が自分の役柄に文句や不満が言えるのは初日の幕が開くまでのことで、幕が開いてしまえば、自分の役柄を精一杯努めることが役者にとって何より大事なことである。それと同じように、人間に生まれたということは、人生という舞台の幕がすでに開いてしまっているのである。だから自分の境遇や立場に不平不満を言う前に自分に与えられた人生劇の役割を精一杯努めていく。それが人間にとって何よりも大事なことである」ということです。

確かに、この人生という舞台は利害損得、愛憎を軸に複雑多岐な人間関係が織り成す人生劇ですから、思いがけないことや思い通りにならないことがしばしば起こります。

そうかといって自分の役割を他人が代わってくれることなどありません。

人生劇という幕が開いてしまった以上は、愚痴をこぼさず文句を言わず、自分の与えられた役割を懸命に努めることが大事なのです。そうすれば必ずや道が開けてきます。

昨年(平成15年)、大リーグのニューヨークヤンキースに移籍をして素晴らしい活躍をされたプロ野球選手に松井秀喜という人がいます。

年末にNHKテレビで松井選手の特別番組が組まれていましたが、その番組の中でチームの監督であるトーリ氏が松井選手のことを次のように語っていました。

「彼は野球をよく知っている。チームが勝つために自分が今、何をしなければならないかということを実によく心得ている。自分の成績を犠牲にしてもチームの勝利のためにプレーする選手だ。何度か調子を崩しスランプに陥ったこともあるが、そんな時も彼は決して言い訳をせず、また投げやりなプレーをすることなく、ただ黙々と自分の与えられたことを、チームの勝利のために精一杯プレーを続けた。

時にはファンの心ない野次や新聞・テレビで厳しく叩かれたこともあったが、そんなことをもろともせず、チームのために働いてくれた。

この一年を通して彼のプレーを見てきたが、私はこのような選手はいまだかつて見たことがない。彼こそ心から信頼のおける男の中の男である・・・」

自分の与えられたことを、ただ精一杯努める松井選手のそのひたむきな姿勢がトーリ監督の心を打ち「男の中の男」と最大級の賞賛の言葉を送っているのです。

このような松井選手の野球に取り組む姿勢は、「絶対的人生」と言われるものです。

それは周りの選手と比較しないという「人生観」です。  
反対に、周りの人と比較しながら一喜一憂する生き方を「相対的人生」と言います。

もし、松井選手が自分より成績の良い選手を羨ましがったり、妬んだり、或いは自分より成績の悪い選手に優越感を持ったり、見下したりするような「相対的人生観」を持っていたならば、到底このようなひたむきなプレーは出来なかったと思います。

私たちが歩んでいる人生という舞台もまさにこれと同じです。

他人の役割と比べるのではなく、与えられた役割をただひたすら懸命に努めていく、そうした「絶対的人生」を送っていくところに、深い感動を呼ぶ人生が開かれてくるのです。

人生の舞台の幕は、すでに開いています。

阿弥陀さまは私たちに「周りの人と比較する必要はありません。あなたはあなたのままでいいですよ」と、仰っています。それは「幕が開いた限りは絶対的人生を歩むのですよ」と、教えて下さっているのです。

ところが、ここでどうしても自分自身に問いかけねばならないことが一つあるのです。それは、人生の舞台の幕はとっくの昔に開いていることは分かるのですが、来し方を振り返ると、自分の役割を精一杯努めたとは言い難い日暮らしを繰り返してきました。そんな私が果たして、これから思いを新たに、自分の役割を務めていくことが出来るのかということです。

そこで私は、年頭に当たって次のように考えることにしました。

それは、舞台でも物語の節目で、一幕、二幕、三幕というように何幕かに分かれていきます。それと同じように、人生の舞台も何幕かに分かれていると考えるのです。そうしてお正月こそはその何幕目かの幕が開いたところだと受け止めていくのです。

すなわち、「これまでダメだった」と考えるのではなく「これからどうするか」という発想です。

そうすれば「これまでの幕では自分の役割を十二分に果たせなかったけれども、今度の幕こそは・・・」と思いを新たにすることが出来ると思うのです。

私事で恐縮ですが、今年六十歳になります。ということは今年のお正月は六十幕目が開いたんだと考えることにしています。

そうして「この六十幕目こそは・・・」と、その新たな思いを胸に、阿弥陀さまの「そのま

までいいですよ」という呼び声を心の支えにして、この一年を歩いていこうと考えています。

「これまで」ではなく「これから」です。

平成16年2月 「光明寺だより32号」より